

# 修了後の心理臨床活動に役立つ学部・大学院教育の検討

## —臨床心理士養成指定大学院修了生への面接調査—

目白大学人間学部 田島佐登史

### 【要 約】

本研究は、学部および臨床心理士養成指定大学院の教育が、修了後の心理臨床活動に役立っているかについて検討することを目的とした。そのため、指定大学院の修了生11名を対象として、現在の臨床活動に役立っている学部および大学院時代の学習や体験について面接調査を行った。その結果、講義・演習、学内実習、学外実習のそれぞれにおいて、役立っていることがあると示された。役立っている内容としては、講義・演習やSVでの教員の話、実習でCIとかかわる機会の2つが多く挙げられた。また、学部および大学院時代にやっておけばよかったこととしては、心理検査・面接技法の習熟、見立ての立て方についての学習が主に挙げられた。さらに、修士1・2年生が残りの大学院時代にやっておいた方がよいと思うことについては、社会経験という回答が多くみられた。よって、学部および大学院教育としては、実習を充実させること、心理査定や面接について学習・体験できる機会をより多く提供すること、ボランティア体験の機会を提供することの重要性が示唆された。

キーワード：臨床心理士，学部教育，大学院教育，指定大学院

### I はじめに

心理臨床活動に対する社会的ニーズが高まるなか、臨床心理学を専門とする臨床心理士の資格取得者は平成20年現在18,000名を超えている。臨床心理士が専門家として社会に認められるためには、養成するシステムの必要性が指摘されるなか（河合，2001）、臨床心理士を養成するための大学院は、指定大学院156校、専門職大学院4校に上る（財団法人日本臨床心理士資格認定協会，2008）。現在、臨床心理士の資格試験を受験するには、これらの大学院を修了していることが必須の条件となっている。

臨床心理士はスクールカウンセラーとして中学校10,000校、小学校1,100校に配置されるなど、近年社会的に広く認知されつつある（山中，2008）。このように、臨床心理士による心理臨床活動が社会制度の中に位置づけられるなか、臨床心理学の教育は重要なものとなってきてい

る（下山，2001a）。

指定大学院では、臨床心理面接や査定などについての講義・演習、臨床心理実習、修士論文作成指導が主に行われている。このような専門家を養成するための教育は、役に立つものでなければ意味がない（金沢，1998）。今後は、指定大学院の質的展開が重要課題とされるなか（藤原，2008）、修了後の心理臨床活動に役立つ質の高い教育をいかに提供できるかが課題である。

指定大学院での教育が役立つ内容を提供できているかについては、近年研究が行われ始めている。青木・堀江・飯田・井上・勝倉・根津・増田（2008）の研究では、ある指定大学院の大学院生および修了後1・2年の修了生を対象に質問紙調査を行った結果、大学院時代役に立ったこととしては、「実習」が最も多く、次いで実践に即した「講義」という回答が多くみられて

Table 1 本面接における質問項目

- 
- |   |
|---|
| ① 学部および大学院の講義・演習で学んだこと・体験したことのうち、現在の臨床活動をする上で役に立っていると思うこと                     |
| ② 大学院の学内実習で学んだこと・体験したことのうち、現在の臨床活動をする上で役に立っていると思うこと                           |
| ③ 学部および大学院の学外実習（無償および有償のボランティア活動を含む）で学んだこと・体験したことのうち、現在の臨床活動をする上で役に立っていると思うこと |
| ④ 学部および大学院の講義・実習で学んだこと・体験したことのうち、現在の臨床活動をする上では役に立っていないと思うこと                   |
| ⑤ 現在の臨床活動をする上で、学部および大学院時代にもっとやっておけばよかったと思うこと                                  |
| ⑥ 臨床心理学専攻の修士1・2年生（M1・M2）にとって、残りの大学院時代にやっておいた方がよいと思うこと                         |
- 

いる。また、大学院時代にやればよかったこととしては、大学院生と修了生ともに「知識を身につける」が最も多く挙げられている。身につけたい知識については、大学院生が漠然と「知識全般」と回答しているのに対して、修了生は「見立て・査定力」や「技法」など、現在の実務に直結した具体的なものが多かったとしている。しかし、日本では、このようにカウンセラー教育について訓練プログラムを評価したり、学生のニーズを調べたりする研究が乏しいとされている（金沢，1998）。指定大学院において質の高い教育を提供するためには、教育内容やシステムについて検討を重ねていくことが今後必須と思われる。

なお、指定大学院等で臨床心理学を学ぶにあたっては、学部段階で心理学の基礎知識を学習していることが前提となっている（下山，2001b）。そのため、大学院から初めて臨床心理学を専攻する者は、大学院入学後に学部の科目を履修することが望ましいとされている（日本心理臨床学会カリキュラム検討委員会，1993；大学院における臨床心理学教育のカリキュラム作成ワーキンググループ，2001）。よって、臨床心理学の教育について検討する際には、大学院での教育だけでなく、学部での教育を含めて考える必要があるといえる。

そこで、本研究では、学部および指定大学院の教育が、修了後の心理臨床活動に役立っているかについて検討することを目的とする。そのため、指定大学院の修了生を対象として、現在の臨床活動に役立っている学部および大学院時

代の学習・体験等について、面接調査を行った。

## II 方法

### 1. 調査時期

2007年8月。

### 2. 調査対象

第1種指定大学院であるA大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士課程を修了し、調査時までに心理臨床活動に従事していたことがある11名。修了後1年目4名、2年目5名、3年目2名であった。男女別に関しては、男性3名、女性8名、年齢は20代8名、30代1名、40代1名、50代1名であった。学部にて心理学を専攻していたのは11名中9名（82%）であった。調査時までに従事していた領域を複数回答可にて質問したところ、「教育」10名（91%）が最も多く、次いで「医療」4名（36%）、「福祉」1名（9%）、「産業・労働」1名（9%）という回答がみられた。なお、臨床心理士の資格取得者は、修了後1年目の者が未受験ということもあり、11名中5名（45%）であった。

### 3. 調査方法

1対1での半構造化面接をA大学構内の面接室または院生室にて、30分から1時間程度行った。

### 4. 質問項目

学部および大学院時代の学習・体験のうち、現在の臨床活動をする上で役に立っていると思うことについて、講義・演習、学内実習、学外実習ごとに質問した。また、現在役に立っていないこと、学部および大学院時代にもっとやっ

ておけばよかったこと、修士1・2年生（以下M1・M2）にとって残りの大学院時代にやっておいた方がよいと思うことについても質問した。質問項目の一覧はTable 1に示す。なお、本面接の最後に、質問項目に回答した感想を尋ねた。

### 5. 分析方法

KJ法（川喜田，1967；川喜田，1970）の手続きに従った。質問項目への回答を「単位」として抜き出した後、記述内容の本質が近い単位同士をグループとしてまとめ、命名した。

## Ⅲ 結果

### 1. 各質問項目への回答

現在の臨床活動で役に立っていること等について、質問項目ごとに回答をまとめた。各回答の要約を単位として「」内に示し、単位を分類することにより生成されたグループ名を〈〉内に示した。また、グループに含まれる単位数は（ ）内の数字に示した。なお、講義・演習、学内実習、学外実習についての回答は、Table 2に一覧を示した。

#### ①講義・演習

学部および大学院の講義・演習における学習・体験のうち、現在の臨床活動で役に立っていることに関して、最も多かった回答は〈講義・演習での教員の話〉（6）であった。次いで〈カンファレンス〉（5）、〈面接・査定ロールプレイ〉（5）、〈臨床心理学の知識〉（5）が多かった。その他には、〈修士論文作成〉（1）、〈統計〉（1）、〈パワーポイントを使用した講義〉（1）、〈ゼミでのディスカッション〉（1）が挙げられた。

#### ②学内実習

大学院の学内実習に関しては、〈スーパーバイズ（以下SV）〉（6）、〈学内実習でクライアント（以下CI）とかかわる機会〉（6）という回答が多く挙げられた。その他には、〈継続陪席〉（1）が挙げられた。

#### ③学外実習・ボランティア活動

学部および大学院の学外実習やボランティア活動に関しては、〈学外実習でCIとかかわる機会〉（17）が最も多く、次いで〈臨床現場への参入〉（7）という回答が多くみられた。その他

には、〈臨床現場の職員からの教え〉（2）が挙げられた。

#### ④役に立っていないこと

現在の臨床活動では役に立っていないことに関しては、〈特になし〉（4）という回答が最も多かった。理由としては、「先の視点に立つと、すべて役に立っていると思う。今、直接的に役に立ってなくても、たとえ今の臨床現場で使わない心理検査についても、こういうCIが来談したときに、こういう検査が使えるということは知っておくべきだと思う」などが挙げられた。

一方、役に立っていないこととしては、〈講義にて他の院生による発表を聞くこと〉（2）、〈論文や本をまとめて発表すること〉（1）、〈心理学史・概論〉（1）、〈英語論文を和訳すること〉（1）、〈統計〉（1）という回答が挙げられた。

#### ⑤もっとやっておけばよかったこと

現在の臨床活動をする上で、学部および大学院時代にもっとやっておけばよかったことに関しては、〈心理検査・面接技法の習熟〉（6）という回答が最も多く、次いで〈見立ての立て方についての学習〉（3）が多かった。

〈心理検査・面接技法の習熟〉の理由としては、「発達検査や心理検査を1つでもいいから習熟しておけばよかった。自分の得意な技法やこれをやってきたというものを1つ持っておけば、自信につながったのではないかと思う」などの回答がみられた。また、〈見立ての立て方についての学習〉については、「アセスメントをする際、どういうところに焦点を当てて見立てを立てたらいいか、もっと学べたらよかったと思う」などの理由が挙げられた。

その他に、〈スーパーバイザーを見つけること〉（2）、〈さまざまな心理療法についての体験学習〉（1）、〈心理検査の被検者体験〉（1）、〈連携についての学習〉（1）、〈心理学の理論についての本を読むこと〉（1）、〈発達障害の歴史についての学習〉（1）、〈薬についての学習〉（1）、〈入念な計画による修士論文作成〉（1）、〈統計の基礎学習〉（1）、〈遊びなど心理学以外のこと〉（1）、〈興味がある以外のことについての勉強〉（1）、〈考え方の違う同期生との会話〉（1）、〈自信をつけること〉（1）が挙げられた。

Table 2 現在の臨床活動に役立っている学部および大学院時代の学習と体験

	グループ	主な単位
講義・演習	講義・演習での 教員の話	・ゼミの教員と接するなかで、教員の考え方や臨床に対する姿勢、人に対する真摯な態度を学んだこと ・教育系の講義にて、教員の体験談を聞いたことで、スクールカウンセラーとして学校に入ったときに広報活動や先生との連携などの手が打てる
	カンファレンス	・他の院生が発表していたケースについて話を聞いたことが、いま子どもの状況を理解するときに役立つ ・いろんな人の意見を聞きながら、短時間で自分の考えをまとめて意見を言う場面を経験したことは、現在の職場での会議にて、いろんな意見が出た後に心理職としての意見を求められる際、役立っている
	面接・査定の ロールプレイ	・本を読んでいてもわからないことを実際にやってみて、感じたり学んだりできたのはいい経験になった ・ロールプレイでやったときと同じような子どもが来たときに、自分が考える余裕やその子を見る余裕につながっていると思う
	臨床心理学の知識	・スクールカウンセリングの講義で、先生とのつながりを大事にして、相談室にこもらずコミュニティ的に動き、どう先生と連携していくかということを学んだ ・精神医学の講義で、DSM-IVに沿った形でいろんな病態水準を勉強したことが、患者理解に役立っている
	修士論文作成	・修論をやったことで、こういう研究があるということがわかったり、学会発表ができキャリアが積めたりした
	統計	・スクールカウンセラーになってから、相談件数等についての報告書を作成する際に役立っている
	パワーポイントを使用した講義	・心理教育プログラムの作成で、生徒に画面でやり方を見せるときに、どうやったら人を引き付けられるか、先生向けに学術的にやるにはどうしたらいいか考えるときに役立っている
	ゼミでの ディスカッション	・ゼミの教員やゼミ生とディスカッションをした時間は、臨床に対する姿勢などについて向き合えた大事なものだった

### ⑥M1・M2のときにやっておいた方がよいこと

臨床心理学専攻のM1・M2にとって、残りの大学院時代にやっておいた方がよいと思うことに関して、最も多かった回答は〈社会経験〉(4)であった。

〈社会経験〉については、「ボランティアや相談機関に行って現場を知ったり、心理と関係なくてもいいから人とのコミュニケーションが取れるようになると、心理の仕事につながる部分もあると思う」などの理由が挙げられた。

その他には、〈同期との交流の維持〉(2)、〈臨床のセンスを磨くこと〉(2)、〈学会・研究会への参加〉(1)、〈院生同士での勉強会〉(1)、〈難しい理論についての学習〉(1)、〈臨床心理士資格試験に向けての勉強〉(1)、〈自分の得意分野(売り)を得ること〉(1)、〈自己管

理能力を身につけること〉(1)、〈授業外での先生・先輩・同期との会話〉(1)、〈先生や同期との飲み会への参加〉(1)が挙げられた。

### 2. 感想

本面接での質問項目に回答した感想として、最も多かった回答は、〈振り返りとしてのよい機会〉(5)であり、次いで〈今後の有効活用〉(3)であった。

〈振り返りとしてのよい機会〉については、「何をしとけばよかったとか、今何が役に立っているかとか、こういう機会がなければ考えることはなかっただろうと思って、いい機会になったと思う」などの理由が挙げられた。また、〈今後の有効活用〉については、「やっておけばよかったと思うことは、今の自分に足りてないことだから、今後やろうかと思う」などの回答

	グループ	主な単位
学内実習	SV	<ul style="list-style-type: none"> <li>・CIを思いやる気持ちの大切さに改めて気付けたことで、今のCIに対して思えるようになったことと、自分を振り返って点検できるようになったことは大きい</li> <li>・カウンセリングのケースの展開が自分でわかるようになったことと、たとえ困ったケースがあっても、よくも悪くもケースは動くという信念を得たことは何事にも変えがたい</li> </ul>
	学内実習でCIとかかわる機会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今でも同じような子どもに会ったときの理解につながっている</li> <li>・プレイセラピーにて、子どもの目線に降りて一緒に遊ぶコツがわかり、今の相談室にて、子どもの目線に合わせるときに役に立つ</li> </ul>
	継続陪席	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続ケース陪席を通して、分析的な考え方で深く考えていく視点を持てた</li> </ul>
学外実習・ボランティア活動	学外実習でCIとかかわる機会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習で出会った不登校を経験したことのある子どもたちは、こういうことをきっかけにうまく学校に戻っていきたくていたということを思い出しながら、いまかかわっている子どもたちと面接をしている</li> <li>・子どもからの生のリアクションから学んだことが、仕事をしていく上でも、子どもの対応をするときの仮説を考える際の広がりにつながっている</li> </ul>
	臨床現場への参入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談室をどうやって運営していくか、どの機関とつながっていてどういうやり取りをしているのかについて、生の現場を見られた</li> <li>・学部時代に、ボランティア活動ができたことで、興味の方向性が決まった</li> </ul>
	臨床現場の職員からの教え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習で現場の心理職や教育関係者から教わった対応の仕方や考え方が今に活かしている</li> <li>・自分でわかる範囲でやった上で、後で具体的に対応の仕方を教えてもらった</li> </ul>

がみられた。

一方で、〈回答の難しさ〉(2)「普段考えないことだから、答えが出てこないし、よく覚えていない」という回答もあった。

#### IV 考察

##### 1. 修了後に役立つ学部・大学院教育

学部および大学院時代の学習や体験が、修了後の臨床活動をする上で役立っているかに関しては、講義・演習、学内実習、学外実習のそれぞれにおいて、役立っていることがあるという結果が得られた。現在の日本における臨床心理学の教育方法は、講義、演習、実習の3つに大別されるが(下山, 2001b)、これらすべてが役立っていることが示されたといえる。

役立っている内容としては、講義・演習やSV

での教員の話、実習でCIとかかわる機会の2つが多く挙げられた。講義・演習やSVでの教員の話は、主に臨床現場での実践に活用できるという点において役立っていると思われる。さらに、臨床活動に対する姿勢など、心理職としての態度を習得するという点においても役立っていると考えられる。また、実習でCIとかかわる機会を持つことは、実際にクライアントと出会い、SVを受けながら、実践的に援助の仕方を学ぶことは必要不可欠とされているように(濱野, 2005)、学生にとって得るものが大きいと思われる。臨床心理学においては、実践を通じた学びが最も重要とされているため(大学院カリキュラム委員会, 2001)、学生がCIとかかわる機会をできるだけ多く持てるよう、今後も実習をより充実させていく必要があるといえる。

また、学部および大学院時代にやっておけばよかったこととして、心理検査・面接技法の習熟、見立ての立て方についての学習が主に挙げられた。青木ら（2008）の研究では、大学院時代に身につけたかったこととして、修了生は「見立て・査定力」や「技法」を挙げているが、本研究においても同様の結果が得られたといえる。大学院の学習で中心となるのは、アセスメントや介入という実践活動の技能学習とされているが（下山，2001b），学部や大学院時代に、心理検査や面接技法、見立ての形成について十分に学習できることへのニーズが強く示唆される。よって、今後は学部および大学院において、心理査定や面接について学習・体験できる機会をより多く提供することが重要と思われる。

さらに、M1・M2にとって残りの大学院時代にやっておいた方がよいと思うことについては、社会経験という回答が多くみられた。社会経験は、学部で学習しておくことが望ましい内容の一つに挙げられており、施設見学やボランティア活動などで社会体験を積むことによって得られるとされている（下山，2001b）。黒沢・日高・張替・田島（2008）の研究では、学部や大学院時代のボランティア体験が学生の「人間関係形成能力」を育成している可能性も示唆されている。臨床心理士として社会からの多様な要請に応えるためには、職業人としての社会性も厳しく問われるなか（鶴，2001），学部や大学院において、ボランティア体験ができる機会を与えることは、学生の人間的成長や社会性の基礎を育むという点において重要といえる。

すなわち、学部および大学院教育としては、実習を充実させること、心理査定や面接について学習・体験できる機会をより多く提供すること、ボランティア体験の機会を提供することの重要性が示唆された。

## 2. 本面接の意義

本面接の感想として、〈振り返りとしてのよい機会〉が最も多く挙げられた一方で、〈回答の難しさ〉も挙げられた。学部および大学院での学習や体験が、現在どのように役立っているか考えることは、容易なことではないと思われる。しかし、援助専門職になるにあたっては、自分自身を振り返ることの重要性が強調されており

（Corey & Corey, 1998 下山監訳 2004），本面接のように、自分自身の学部および大学院時代について振り返ることは意義があるといえる。

また、〈今後の有効活用〉という回答が挙げられたように、修了生は本面接を通して、今後の臨床活動をより充実させようという意識を持ったと考えられる。

## 本研究の限界と今後の課題

今回の調査では、指定大学院の修了生を対象として調査を行った。しかし、教育システムを検討する際には、学生側の希望に沿うのみで構築することが可能かどうか、教育機関として社会的責任を果たすにはユーザーの意向とのズレをどのように克服するか等について考慮することが必要とされている（藤原，2001）。よって、今後は、学生側のニーズを反映させるだけでなく、学部および大学院側として提供できる教育内容（シーズ）を明確にすることが必要である。また、現場の心理職や他職種からの教育ニーズについても把握し、多角的に教育内容やシステムを検討する必要があると思われる。

また、学部生および大学院生による授業評価や、教員による自己評価を有効に活用し、教育内容やシステムをリファインしていくことも重要である。心理学系の学部や指定大学院が数多く設置されてきているなか、教育をリファインしながら各大学の特色を出していくことが、今後は特に重要になってくるとと思われる。

本研究では、指定大学院であるA大学大学院の修了生のみを対象として調査を行ったため、本調査から得られた結果は何らかの偏りが内在していると考えられる。今後は、A大学院以外の指定大学院および専門職大学院の修了生を対象とした調査を実施し、学部および大学院の教育が、修了後の心理臨床活動に役立っているかについて検証することが、課題の一つとして挙げられる。

## 謝辞

本研究の調査にご協力くださいましたA大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻の修了生の方々に、心より御礼申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 青木佐奈枝・堀江姿帆・飯田順子・井上忠典・勝倉孝治・根津克己・増田實（2008）. 大学院における教育研修を考える1—大学院生、修了生のアンケート調査をもとに— 日本心理臨床学会第27回大会発表論文集, 481.
- Corey, M. S. & Corey, G. (1998). *Becoming a helper*. 3rd Ed. Brooks/Cole Publishing Company (コーリイ, M. S.・コーリイ, G. 下山晴彦 (監訳) 堀越勝・堀越あゆみ (訳) (2004). 心理援助の専門職になるために—臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト— 金剛出版)
- 大学院カリキュラム委員会 (2001). 大学院カリキュラムの具体的な構成案 心理臨床学研究, **19特別号**, 11-13.
- 大学院における臨床心理学教育のカリキュラム作成ワーキンググループ (2001). 臨床心理士養成カリキュラムの科目更正 (案) 臨床心理士報, **13特別号**, 76-80.
- 藤原勝紀 (2001). 臨床心理士の養成に関する教育システムの課題と展望 臨床心理士報, **13特別号**, 39-45.
- 藤原勝紀 (2008). 創立二〇周年に自覚すること (財) 日本臨床心理士資格認定協会二〇周年記念事業委員会 (編) 臨床心理士の歩みと展望 誠信書房 pp.67-70.
- 濱野清志 (2005). 心理臨床センターにおける訓練のあり方 鎌 幹八郎 (監修) 川畑直人 (編) 心理臨床家アイデンティティの育成 創元社 pp. 17-24.
- 金沢吉展 (1998). カウンセラー—専門家としての条件— 誠信書房
- 河合隼雄 (2001). 序 心理臨床学研究, **19特別号**, 1-2.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論新社
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法 中央公論新社
- 黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史 (2008). 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察— 目白大学心理学研究, **4**, 11-23.
- 日本心理臨床学会カリキュラム検討委員会 (1993). 臨床心理士養成のための大学学部・大学院カリキュラム講義 心理臨床学研究, **11特別号**, 15-21.
- 下山晴彦 (2001a). 高度専門職業人としての臨床心理士養成モデル 臨床心理士報, **13特別号**, 25-30.
- 下山晴彦 (2001b). 臨床心理士養成カリキュラム 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 I 臨床心理学とは何か 東京大学出版会 pp.191-209.
- 鶴光代 (2001). 臨床心理士養成システムと大学院カリキュラムの検討 心理臨床学研究, **19特別号**, 5.
- 山中伸一 (2008). 臨床心理士に期待すること (財) 日本臨床心理士資格認定協会二〇周年記念事業委員会 (編) 臨床心理士の歩みと展望 誠信書房 pp.11-14.
- 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (2008). 新・臨床心理士になるために [平成20年版] 誠信書房

## Education in university and graduate school of clinical psychology

—implications from an interview of young clinical practitioners  
who completed certified graduate schools—

Satoshi Tajima

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2009 vol.5

### **[Abstract]**

The purpose of this paper was to examine whether education in university and certified graduate school of clinical psychology proved to be useful for subsequent clinical work. 11 young clinical practitioners who completed certified graduate schools, participated in an interview about useful learning and experiences during their univ/graduate school years. As a result, it was shown that lecture, seminar, and in-school and extra-curricular training were useful. Two of the most popular answers were the teachers' lectures, seminar and supervision, and experience with clients in practice. Moreover, what they wished they had done during their univ/graduate school years were to become skilled in a particular psychological test or therapeutic method and clinical formulation. Furthermore, what they feel the graduate students should be during their remaining years have abundant social experiences. Therefore, it was suggested that it was important to provide substantial practice, ample education on psychological assessment and counseling, and opportunities of volunteer experience.

**keywords** : clinical psychologist, education in university, education in graduate school,  
certified graduate school